松　阪　記

―近代の一つの風景―

呉　谷　充　利

城跡

どこかに記しておきたかったことである。が、私の妄想であるかもしれない。今年はいつにない冷夏であった。夏期休暇も終わろうとする一日、私は一人思い立って松阪に来た。何か具体的な目的があったのではない。どうしてもそこに行ってみたい気持ちに駆られたのである。

特急の車内販売の弁当をあてにしたのであるが、以前あったこのサービスはもう無くなっていた。始発駅の近鉄上本町で簡単な弁当を手にし、車中の人になった。着いたのは、昼すぎであった。降りてみれば、冷夏とはいえ、日差しが強かった。

松阪の市のほぼ真ん中に天正16年（1588年）蒲生氏郷によって築城された、現在は石垣だけが残った城跡がある。界隈は、城下の端正な佇まいを見せている。その城跡を舞台にした生活をもとに、梶井基次郎が「城のある町にて」を書いている。その一節である。

次つぎ止まるひまなしにつくつく法師が鳴いた。「文法の語尾の変化をやっているようだな」ふとそんなに思ってみて、聞いていると不思議に興が乗ってきた。「チュクチュクチュク」と始めて「オーシ、チュクチュク」を繰返えす、そのうちにそれが「チュクチュク、オーシ」になったり「オーシ、チュクチュク」にもどったりして、しまいに「スットコチーヨ」「スットコチーヨ」になって「ジー」と鳴きやんでしまう。……

彼は、この地の風光を見事にとらえている。蝉の声が日本全国どこでも同じなのかどうか調べたこともないので、よくわからないが、その鳴声にはところところによって微妙なちがいがあるにちがいない。梶井基次郎が書き留めた蝉の声は、紛れもなく筆者が遠き夏の日、城跡から五、六里ほど離れた故郷で聴いたあの蝉の鳴声であり、それはいま音のない心象の世界で鳴きつづけるのである。

城のすぐ下に正面５間、奥行５間の御城番屋敷が軒を連ねている。

赤壁校舎

ところで、古(いにしえ)を彷彿させるこの御城番屋敷の突き当たりに道を挟んで赤い木造校舎が建っている。前に石碑があり、「赤壁校舎」と題されこう書かれている。

本校は、明治35年（1902年）4月に応用化学科専攻の５年制工業高校として全国にさきがけて開校された。

当時は実験に使用する硫化水素の影響を受け建物の塗料が黒変すると考えられていたため、校舎の外壁はすべて変色しない朱（硫化水銀）で塗られていた。本校はこの色のため創立早々から赤壁（せきへき）と呼ばれ多くの人々に親しみ愛されている。

この建物は、旧三重県立工業学校製図室として明治41年（1908年）３月に竣工されたもので、現存する唯一の赤壁校舎である。

今日では平凡な地方の工業高校になってしまっているが、明治に創立されたこの工業高校は以来この地の俊才を集めた。電気工学の分野で名を馳せた丹羽保次郎などがその筆頭にいる。かつての面影が「赤壁校舎」に残されている。創立から数えて、百年の歳月が流れ、現閣僚の一人、坂口力が再訪している。彼もこの学舎で学んだのである。

実は、筆者も市の文化財になった当のこの校舎で高校生活を送った。いまそのときをふり返って書いているのである。しかしながら、その記憶はなつかしいというより、苦い。かつての光彩を欠いていたとはいえ、なお伝統の誉れを背にした授業があったことを覚えているが、それは私には響かなかった。なおかつ、体を壊した。内臓の潰瘍で、惨憺たる生活であった。

それでも、なつかしさがこみあげてくる思い出がないわけではない。入学まもない頃学校行事の一つとして行なわれた映画観賞である。確か「スペンサーの山」というタイトルのアメリカ映画であったと思う。若い男女の屈託のない恋愛ドラマで、女の方は裕福で、男の方は貧乏であった。二人が繰り広げる情景は新鮮で、余りにも人間的であった。光にあふれたアメリカの大地、戯れる男女、スクリーンには性をも交えた人間の率直さと優しさが満ちていた。純粋なその心の世界に魅せられ、感動したことを私は明瞭に憶えている。その映画は今でもなつかしい。それはまた人間の心が表現される、そうした人間劇のもつ世界のゆたかさに触れた数少ない機会でもあった。

いわゆる進学校でなかったのであるから、時間割はほとんど専門の化学の科目で占められていた。大学の課程で習うようなカリキュラムを先取りするこの科目をこなしていくためには志をもった緊張感が必要であった。無い者は自分を無にして教科に従うことを暗黙裡に求められていたと思う。

教室で放たれた教師の強い叱責は今でも私の脳裏に焼き付いている。「○○、ホックがは

ずれてる。」学生服のつめ襟のところにホックが付いていた。そのホックが合わされずにだらしなくなった一人の生徒の服装がきびしく注意されたのである。この出来事はこの校舎での勉学の仕方を象徴するものであっただろう。先生は別の日、「卒業生から、こんなにたくさんの手紙をもらっている。」と高々に手紙の束を挙げた。その先生は尊敬されつづけたのである。卒業生が表わした敬意を私は否定しない。しかしながら、私にはあるわだかまりが残った。そのわだかまりは消えることはなかった。

教育という言葉の意味は、英語でいえば "educe" であり、それは「(内にあるものを) 外に引き出す」ことを語源としている。私にはその教育がこれとはまったく逆に「(外にあるものを) 内に押し込むように」思えたのである。時間割はぎっしりと専門の科目でつまっていた。内にあるものを外にひき出すゆとりがなかったのである。いつのまにか、私の心のなかに密かな反旗がひるがえっていた。

私の勉学はしたがってほとんど空白のまま過ぎてしまった。大事な青春のこの勉学の空白を取り戻すことは大変であったが、私は家庭の事情も許すようになって進学の道をすすんだ。このとき、私は本当の意味で文学作品に触れた。「源氏物語」や「細雪」あるいはロマン・ロランの小説、これらの作品に表現される人間の機微の奥深さとゆたかさは、乾いた砂漠の砂が水を吸い込むように私の渇ききった心を潤した。

鈴屋

それから、30数年の時をかぞえ私は今松阪城の石垣に立って御城番屋敷から赤壁校舎へとつづくかつての城下を見ている。この同じ城跡に本居宣長の旧宅が移築されている。魚町にあったその家がここに移築されたのは明治42年（1909年）のことであり、現在同じ場所に本居宣長の記念館も建てられ、旧宅は宣長が鳴らした鈴にちなんで「鈴屋」の愛称で親しまれ、市のシンボルになっている。「鈴屋」と「赤壁校舎」、のどかな町並のこの二つの建物はしかしながらいま私のなかで磁石の同じ極のように斥けあって、対峙するのである。

1730年松阪のこの城下に生まれ、1801年に没した当代随一の国学者本居宣長の思想はいわゆる「もののあはれ」で広く知られる。古学の道が古事記にあり、そのためには万葉集に学ぶことが肝要だと賀茂真淵が宣長に伝授した教えがある。1703年（宝暦13年）真淵67才、宣長34才のこの一夜の出来事こそ、後々に語り継がれる「松阪の一夜」である。古学は古人の生きたその世界に返らねばならないという真淵の学問の精神が宣長に引き継がれる。

このような優れた学問の精神が同じ城下に「鈴屋」の名をもって刻まれていたのであるが、赤壁校舎でこれについて語られた記憶は私にない。もっともそのような古学の精神で考えてみれば、化学はその起源をアラビアの錬金術にもち、化学を真に捉えるためにはま

ずアラビア語を勉強しなければならないということにもなって、本居宣長の古学はおよそ赤壁校舎の授業において場違いなものであったのかもしれない。

一方は、人間の感情を問い、他方は自然のなりたちを実験して応用しようとするのであるから、学問の意味はおのずと違ってくる。しかしながら、たとえそうであったとしても、もう一歩深く踏み込んで考えてみると、やはり人間と自然は別々のものではなく一体のものではなかったか。

ルネサンスの芸術

いま私のなかでありありと憶い出す一つの壁画がある。ジョットーの絵で有名なスクロヴェーニ礼拝堂を訪れたときのことである。双眼鏡で覗いてみると、そこには無辺の宇宙にこだまするかのように深い人間の悲しみが現わされていた。われわれが体験する悲しみの極点のような人間の魂の叫びにも似た深い感情がそこに描かれていた。

中世の神中心の世界から解放されようとするそうした人間の感情の余すなき表出こそ、ルネサンスの白夜を告げるものに他ならなかった。神としてのキリスト像を人間としてのキリストへと変えるルネサンスの人間復興は、さらに旧来の宇宙観である天動説を反転して新たな宇宙観であるコペルニクスの地動説へと連なった。この宇宙観はケプラーによってより精緻な実験的検証と数学的合理によって捉えられる近代の天文学へと発展する。地動説に象徴される自然科学のめざましい発展は、中世のキリスト教世界から生まれようはずがなかったのである。

近代にみる自然科学の真の源泉をいえば、それは中世の神中心のその世界像を打破したルネサンスのこのヒューマニズムをおいて他にない。ルネサンスのそのヒューマニズムがまさに自然にたいする新たな見方を生んだのであり、その逆ではない。

こうしたことを考えてみるとき、ヒューマニズムと科学的自然観は起源において一つである。したがってヒューマニズムなき科学があるとすれば、そこには別の力が外から働いていることになろう。その二つはいわばシーソーのように相均衡して初めて真の生命をもつといえる。ヒューマニズムと自然科学が均衡するその中点こそがルネサンスがもつ神聖の意義を明白にしている。

ルネサンスにおけるこのような人間像の頂点におそらくレオナルド・ダ・ヴィンチがいる。彼の絵画のめざすところは、人間の魂の意図を肉体の動きを通して表現することにあったとされている。人間の魂とはもっとも根源的な人間自身の問題であり、これにたいする肉体の動きとは、自然観察の方法によって把捉される。彼の克明な肉体のスケッチがこれを端的に示している。その眼は肉体の解剖にまで及んでいる。

レオナルド・ダ・ヴィンチはまさに人間自身の問題と自然観察の方法とを一つにするルネサンス絵画の宇宙に向かったのである。この至難のわざこそ、彼の絵画の傑出した意味

を語っている。

森鷗外の明治

一人の翁が広々とした眼前の海を眺めている。寸刻のその記憶のなかに今、自身の過去の何十年かの道程がひと続きになって、蘇っている。そんな時、ふと書き棄てた反古であると彼は言う。

生れてから今日まで、自分は何をしているか。始終何物かに策うたれ駆られているように学問ということに齷齪している。これは自分に或る働きが出来るように、自分を為上げるのだと思っている。その目的は幾分か達せられるかも知れない。しかし自分のしている事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めているに過ぎないように感ぜられる。その勤めている役の背後に、別の何物かが存在していなくてはならないように感ぜられる。策うたれ駆られてばかりいる為めに、その何物かが醒覚する暇がないように感ぜられる。勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留学生というのが、皆その役である。赤く黒く塗られている顔をいつか洗って、一寸舞台から降りて、静かに自分というものを考えてみたい、背後の何物かの面目を覗いて見たいと思い思いしながら、舞台監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め続けている。この役がすなわち生だとは考えられない。背後にある或る物が真の生ではあるまいかと思われる。しかしその或る物は目を醒まそう醒まそうと思いながら、又してはうとうとして眠ってしまう。この頃折々切実に感ずる故郷の恋しさなんぞも、浮草が波に揺られて遠い処へ行って浮いているのに、どうかするとその揺れるのが根に響くような感じであるが、これは舞台でしている役の感じではない。しかしそんな感じは、一寸頭を挙げるかと思うと、直ぐに引っ込んでしまう。

(「妄想」)

通奏低音のごときあるさみしさが文を縫っているこの文面はわれわれの心を打つ。彼の精神はそのさみしさに凛として堪えている。さみしさは彼のこころのなかの空白から来ている。その空白を空白のままに堪えて彼はしずかにそれを見つめている。その凛々しさにわれわれは深く惹かれる。森鷗外の晩年のこの一文は、自身の心中を語っている。それは本統の心の世界を綴っている。

明治の精神は和魂洋才に示される。和魂は富国強兵に向かって突きすすみ、近代日本を利する西洋文明を貪欲なまでに摂取したのである。森鷗外はこの明治日本の国運を背負って生きている（1862-1922)。この任務に耐え、自身をふり返るその姿は一抹の悲しさをもっている。われわれは一身を明治の日本に捧げた鷗外その人のこころの襞に触れている。

彼はむち打たれていた。そのむちは外から放たれている。むちの打ち手は畢竟明治の日

本である。彼はこの明治日本の舞台に立つ役者にしかすぎなかった。それは本統の自分ではなかった。彼は心中を吐露し、本統の自分はどこか別のところにあるように思えると語っている。故郷の恋しさが時に本統の自分を誘う。がそれはまたすぐ消えてしまう。鷗外の一つの空白がいみじくも語られる。

そうした彼の心の真空を埋める一つの出来事が起こる。「舞姫」である。留学先ドイツでのこの情事はいわば起こるべくして起こった彼の真実であったろう。が、悲痛なこの情事も結局は友人のはからいで表向きにはことなきを得る。鷗外その人の生身の感情は、明治日本の国運を賭けた抗策のうちに打ち消されたのである。

しかしながら翻ってみると、明治日本の幕間に見るようなこうした「舞姫」や「妄想」の世界は明治改元における人間の欠落を透かして見せてくる。和魂洋才の本来の意味をいえば、それはそもそも二つにまたがって存在している。和魂和才と洋魂洋才である。この二つの文化を半分に切って強引に繋ぎ合わそうとしたのが明治の日本に他ならなかった。これを繋いだものはまさに人間としての個人を超えた国家の力であった。日本の近代は幸福な門出をもってはいなかった。

眼下の風景

そうした明治日本の残影でもある赤壁の校舎がいま城の下に見える。校舎の赤い壁に本居宣長の移築された家が対蹠している。宣長には鷗外の空しさはなかった。彼は誇らしげに描いた自画像を遺している（1790)。寛政から明治へと進んだ日本の一つの風景が奇しくも残されて眼の前にある。「鈴屋」と「赤壁校舎」はその風景のなかに宣長と鷗外のそうした相貌を彷彿させてくる。

眼下の風景は依然として二人の傑出した人物のその相貌に現われる文化の根本の問題を残したまま、和魂洋才をなした近代日本の痛々しさとそれに堪えた人間の一抹のさみしさと美しさを語りつづけている。

筆者がこの赤壁の校舎でひそかにひるがえした反旗はあるいは近代日本のこの深部の問題に届くものであったのかもしれなかった。

参考文献

西洋美術史　監修　高階秀爾　1992 美術出版社

本居宣長の生涯　その学の軌跡　岩田隆　1999 以文社

出典

梶井基次郎 1901-1932 ちくま日本文学全集 所収「城のある町にて」1992 筑　摩書房

鷗外全集　第八巻　所収「妄想」昭和46年　岩波書店